



綾滝にて 撮影 横山隆

[緑爽会10月例会]

講演と山行の集い

[期日] 10月15日(土)～16日(日)

15日19時～ 講師 文筆家 山口耀久氏

著書に『北八つ彷徨』『八ヶ岳挽歌』など

(詳しくはP. 3参照)

16日 山行 飯盛山 係 横山 隆

頂上は八ヶ岳をはじめ甲斐、信濃の名峰を見渡せる絶好の展望台

野辺山→平沢峠→飯盛山→平沢→清里

[地図] 2万5千 八ヶ岳東部・谷戸

[集合] 15日 中央線小淵沢駅前 15時10分

[宿泊先] 北杜市大泉町西井出8240-4012

TEL 0551-20-5634

「ロッジ山旅」 長澤洋氏(JAC会員)経営

[会費] 9,000円(1泊2食 諸雑費を含む)

[申込] 松本恒廣(03-3326-2892)迄

定員20名(先着順)まで受け付けます。

参考 JR中央線(普通)高尾発 12時18分

小淵沢着 14時38分

あずさ17号 新宿発 13時

小淵沢着 15時

●ホームページ「ロッジ山旅」をご覧ください。



緑爽会報 NO. 101

‘11年 9月26日

発行

(社)日本山岳会緑爽会

TEL 03-3261-4433

事務局

松本恒廣 樋口公臣

夏原寿一

近藤 緑 川口章子

横山 隆 渡部温子

「緑爽会九月山行」

奥多摩滝めぐり

島田 稔

台風一五号の迷走を目前にして九月七日(土)に女性七名男性四名計十一名が武蔵五日市駅前に集合、係の川口さんから詳細な地図と、コースの説明を受ける。予定したつづら岩經由上養沢のルートはかなり健脚向で時間もかかるので、綾滝から往路を引き返すことにしたいとのこと。

バス三〇分で千足に着く。林道終点から山道に入り、沢を渡ると天狗滝・綾滝の分岐の標識があつて、先に奥の綾滝を目指す。気温も高くジグザグの道が続いて疲れが見え始めた頃、漸く綾滝に到着、ひんやりと涼しさを味わう。落差二メートル、綾の織物を垂らしたような美しさから「綾滝」と言われ、また、下のほうで泡になって流れるので「泡滝」とも言われている由。昼食後、自己紹介を兼ねたミーティングでは傷害保険の問題を始めいろいろの話がはずんで大変賑やかであった。

綾滝からは用心深く慎重に下ると間もなく水量の多い天狗滝である。落差三八メートル、岩肌を滑るように流れ落ちる秘めやかな滝である。少し下ると小天狗滝を見るが、何故天狗なのか一寸知りたいところである。

沢沿いにジグザグ道を下ると、朝見た分岐を経て林道終点に出て払沢の滝のバス停に向う。小憩後、払沢の滝まで足を延ばすが、さすがに人出は多く賑やかである。途



中の木工品販売店の望遠鏡で、先ほど見たばかりの天狗滝を一筋の白線として遠望することが出来て、本日の滝めぐりは計五滝ということになった。一五時二〇分のバスで五日市に戻り、そば屋で打上げをして散会した。

「参加者」田村佐喜子・松本恒廣・横山隆・鳥橋祥子・佐藤登代子・島田稔・瀬戸英隆・田井具世・中尾千予光・手塚照子

係川口章子 計十一名

●係からの報告

三月二日に浅間尾根を歩く計画をたて参加者の申し込みを待っている時、東日本大震災が起こり、急遽中止をしてから久しぶりの山行に参加者の方々はとても喜んでくださった。とりわけ、滝巡りの企画には。

この案を教えてください。くださったのは松本さんで、初めは檜原村・千足からあきる野市・養沢までのコース。下見で分かったのだが歩いていく人も少なく静かなコース。ただ、残念なことに予定の歩行時間では無理と判断し、相談すると先輩方はアドバイスをしてください。Yさんはコースをファクスで送ってくださった。参加してくださった方々、アドバイスくださった方々に援けられて新前案内人は、無事役目を終えることができました。

さて、最後の報告は、昨年一月にYさんが打ち上げに案内してくださったそばや『魚鶴』この不思議な店名は物忘れのひどい私も覚えていて、下見の帰りに立ち寄り、おかみさんと一談義。閉店の時間を教えてもらい、間に合えば必ず寄ると約束しておいた。

いつもは多い客もこの日には少なく、私の声を覚えていてくださったおかみさんもすぐ出てきて、女性たちと出し汁談義で盛り上がり、ほどよいアルコールを楽しみ、無事終えることができた嬉しさは、忘れられないひとときとなりました。(川口章子)

◆緑爽会秋の予定(1ページ案内の他)
一〇月六日(日)〜七日(月) 特別企画「楢山節考」観劇と姨捨周遊(4頁参照)
十一月九日(土) 午後一時〜 J A C集会所「井上靖『氷壁』とその時代」
対談 石原國利・近藤信行

◆原稿募集 原稿・スケッチ・版画・写真・カットなど、いつでもお待ちしています。編集宛にお送りください。167-0042 杉並区西荻北二一〇二二五〇二 近藤緑

戸隠〜志賀〜万座 再訪の旅

狂歌師 芳賀翠柏

国中が酷暑に喘ぐ七月下旬、小森先輩ご夫妻に誘われ(フッシュ山の会の老嬢に混じり)、戸隠〜志賀高原〜万座温泉と二泊三日の小旅行をしました。

戸隠では盛大(?)な酒盛りの翌朝に奥社参詣、志賀高原を経て万座温泉に浸った翌日は草津白根の瓦礫地を登って火口湖の湯釜を覗き、元白根の駒草などを鑑賞して来ました。

現役時代はヒョイヒョイ駆け足で上下していたのに、杖を頼りにゼエゼエと息を切らしながらの現実に、一〇年前の転落骨折がいかに大事件だったかを改めて思い知った次第です。



また、若さに任せ最も充実した舞台だった志賀高原もすっかり様変わりし、昔を偲ぶさすがさえ探しかねる状態。昭和初期、上高地ホテル(現帝国ホテル)・野尻湖ホテル(解体され現存せず)と共に観光振興のため国策で建設された志賀高原ホテルが廃業されているのに愕然。とはいえ、『志賀高原歴史記念館』として往時の姿をそのまま残しているのが救いでした。

また、怨嗟脅迫に悩み苦しみながらも、転任直前に地権者(財団法人和合舎)と合意した基本方針、建造物の外観や色彩などが維持されているのに安堵しました。

当然のこと世代交替も進み、私の仕事ぶりを理解し密かに叱咤激励してくださった人達の多くも故人となりましたが、上信県境に跨る渋峠ヒュッテに老齢病身ながら今も暮らしておられる主と、吹雪の山田峠で遭遇した石混り烈風など思い出を話し合いました。

・戸隠の原野で酒を酌み交わし六〇安保に弾む回想

・蒲団掛け熟睡したり久方の雄鳥(おんどり)の軍勢(とき)高原の朝

・高原の夜明けを告げる時鳥くぐもり諭す雉鳩の声

・神苑に黄鶺(キビタキ)の声美しく響き渡れり戸隠奥社

・星鴉椋の梢で啼きにけり万座温泉松屋の夜明け

・ジヨリジヨリと眼細虫喰(メボソムシクイ)懐かしや草津白根の針葉樹林

・砂礫地を紅く彩る駒草に老いも若きも歓声を挙ぐ

・高山の荒れ地に咲けるお駒草愛しげなれど動き草なり



戸隠神社にて 筆者夫妻 撮影・小森順吉

山口耀久さんのこと

あきひさ

山川陽一

ここに「定本北八ツ彷徨」と「八ヶ岳挽歌」という二冊の本がある。

「北八ツ彷徨」は1960年（昭和35年）に創文社から初版が発行された。その後10版を重ねるが、いったん絶版になり、2001年に平凡社から「八ヶ岳挽歌」の発行とあわせて、新版として再登場した。

1960年といえはよくが大学生の頃で、まだ原生の山岳自然もふんだんに残っていた時代だった。この詩情溢れる珠玉のエッセイは山に親しむ若者たちの心をつかみ、ぼくたち山仲間の間でも、愛読しているものが少なくなかった。時代を超えて読み続けられているこの本は、いまや山岳文学の古典としてゆるぎない地位を築きつつあるように見える。

「北八ツ彷徨」の内容が北八ヶ岳中心であったため、著者は本書のあとがきの中で本峰八ヶ岳を主体にして「続・随想八ヶ岳」を書きたいという意向を表明していた。当初3年後くらいという思惑だったようだが、実際に世に出たのが40年後だったと

いうのだから、自ら遅筆を自認する著者ならずともビックリである。これが「八ヶ岳挽歌」という題名で発行されたもう一冊であった。もし著者の思惑どおり3年後に発行されていたら内容も題名も違ったものになっていたと思う。

著者の年輪と時代の変遷を反映して、前編の「北八ツ彷徨」が、山も人も明るく輝いた讃歌であるならば、後編の「八ヶ岳挽歌」は、その名が示すように、人の悲傷と開発や登山者の増加によって傷ついた山の自然に対する悲しみと怒りの心情を吐露した悲歌といえるのかもしれない。

ぼくが山口さんにはじめてお会いしたのは、3年前、日本山岳会の山梨支部が山梨学院大学のホールで毎年開催している山の博覧会の行事のメインスピーカーとして講演されたときである。話しは山へのつよい憧れと愛情と自然破壊に対する激しい拒絶反応に満ち満ちて、しかも処々ユーモアがアクセントをつけて、来場者は時間のたつのも忘れて聞き入ったのだった。そのとき、ぼくは会場で「八ヶ岳挽歌」の一冊を買って求めて、山口さんからサインをいただいているが、勿論山口さんの方は、ぼくのことなど記憶の片隅にもないだろう。

線に住んでいるのに一度も下りたことがなかった武蔵野台駅に下車して、残暑の昼下がりに強い日差しがアスファルトを照り返す中を5分ほど下っていくと、突き当たり山口さんの住んでいる車返団地があった。

「北八ツ彷徨」の最後の章に「富士見高原の思い出」という一文がある。戦後山口さんは結核の療養のためこの高原療養所で2年間を過ごすのだが、そこでの生活は山口さんのそのごの人生にとって大きな転機を与えたものであった。そこで療養所の近くに住んでいた詩人尾崎喜八との出会いがあり、尾崎喜八を囲むグループの一員に、後に山口さんの妻になる久子さんがいたのを、ぼくはこの一文を読んで知っていた。もしかしてその奥様にも会えるのかなという期待で、車返団地に下る道中緑さんにそつと確かめたところ、数年前亡くなられてしまひ今はひとり暮らしなのだ知らされた。

山口さんは、当年とって85歳、片耳が若干弱くなっているため自ずと3人の話し声は大声になっていったが、博学で頭脳明晰、ユーモアに富んだ山口さんの話題は尽きず、途中近くのレストランでの軽食を挟んで、4時間半にも及んだ。大半が雑談に花が咲いて肝心の打ち合わせは最後にほんの少しだけだった。

アルプの仲間だった緑さんとは積もる話しも多かったが、はじめてのぼくはうまく打ち解けることが出来るか心配だった。ただ、ぼくは、山口さんのふたつの本を愛読していたし、あの詩情溢れる完璧な文章、山や人に対する愛情に満ちた純粋な想いと強い正義感に共感を覚えていたことが味方してくれたのだろう。嫌われないで済んでホッとしている。

(多摩市在住・自然保護委員)

プロフィール



1926年（大正15年）東京都生まれ。

戦争末期の昭和18年に有志と獨標登高会を創立し、初代表。早稲田大学文学部を結核のため休学し、富士見高原療養所生活を送る。平癒後に再び登山活動に復帰し、八ヶ岳をはじめ、甲斐駒ヶ岳摩利支天中央壁、利尻岳西壁などに開拓の足跡を残す。山の文芸誌「アルプ」の編集に参加し、串田孫一らと300号の終刊まで委員を務めた。主な著書は「北八ツ彷徨」「烟霞淡泊」「八ヶ岳挽歌」「頂への道」など。訳書にギド・マニョーヌ「ドリリュの西壁」など。

ひとこと

人生には、この人に出会わなければ転機はなかったという大事な出会いがある。山口耀久さんが富士見の療養所時代尾崎喜八さんに会ったのと同じように、私にとって山口耀久さんは大事な人である。

十代から二十代半ばまでは演劇にのめり込んでいて、俳優座の戯曲研究生から「悲劇喜劇」（早川書房刊）の戯曲研究会々員になり何本かの戯曲を発表もしていた。結婚後は「ただの人」でいたのを、あるとき「アルプ」に書いてみないかという話があった。「常念の見える町」がそれである。散文が書けるかどうかの試金石だった。「アルプ」編集同人の山口さんが推してくださったと聞いている。名文家の山口さんにほめられたことは一生の荣誉だとずっと感謝している。（蜂谷緑）



若き日の山口さん 平凡社版『北八ツ彷徨』より

10月の緑爽会の行事に山口さんを招いて一晩話しを聞くことになっていたのでその下打合せで山口さんに会いに行こうという近藤緑さんに誘われて、9月15日、京王線の車返団地のご自宅を訪ねることになった。近藤緑さん、川口章子さんとぼくの3人である。もう40年以上も京王線沿

一月一九日午後一時三〇分 JACC会館
石原國利・近藤信行対談

井上靖『氷壁』とその時代の為に

蜂谷 緑

「あした来る人」を読む

芳賀孝郎さんのお話の中には、よく先輩の加藤泰安さんが登場してくる。そして泰安さんが「あした来る人」に出てくる山男のモデルだということも伺った。はるかな昔に読んで、おぼろげな記憶しかなかったので、読みなおそうと書店を覗いたが、新潮文庫はすでに絶版。近くの図書館にリクエストして、ようやく手にした。

昭和二九（一九五四）年三月から一月まで朝日新聞朝刊に連載されたこの小説、マナスル登山はじめ世間のヒマラヤへの関心が高まるにつれて、作家もまた「山」に近づき始めたのではないかと思われる。

当時、流行作家の井上靖担当だった朝日新聞の記者が「日本山岳会に面白い人はいませんか」という作家からの意向を、同じ社の先輩の島田巽（名誉会員）さんに伝え、島田さんが「それなら加藤泰安だろうね」と答えたのがコトの発端だったと聞いている。氣を許し合ったクラブライフの楽しさが伝わってくるようなエピソードである。

さて、泰安さんがモデルと言われる「あした来る人」の主人公大貫克平は、妻よりも山を愛する男である。妻の八千代に、「君には十年しかつきあっていないが、これでは二十二年つきあっていないんだからね」といってはばからない。そして妻に黙って氣の合う仲間と、カラコルムの未踏峰に行く準備を進めている。

八千代は女として、夫が自分より大切なものを持っていることが許せない。だが、相手が「山」では、どうすることもできない。そんな八千代の前に、カジカの研究をしているという曾根二郎が現れる。自分の研究成果を出版しようと資金提供者を求めているが、地味な研究なのでうまくいかな。八千代は、朴訥な曾根のために親身になって世話をやき、実家の父に頼み込んで出資者を紹介してもらったりする。初めは妻を無視する克平に対する当付けでもあったが、次第に曾根の人間味に惹かれていく。

一方、克平は友人から貰った仔犬が八千代の反対で近所に預けられ、さらに銀座の洋裁店に回されているのを引き取りに行くと、店主で若いデザイナーの山名杏子と知り合う。彼女は老実業家梶大助から見返りなしの援助を受けて、店を開いたのだった。杏子のもとで、仔犬が大事にされているのを見た克平は、犬をそのまま置いて帰ったばかりか、わざわざ血統書まで付けてやる。カモシカを思わせる杏子は、克平の仲間たちとも親しくなり、やがて足の便のいい銀座の店の二階で彼らの遠征の準備が始まる。そんなある日、鹿島槍で克平が遭難したとの知らせが入る。友人たちはそんなわけはないと本気にしないが、激情にかられた

劇団芸協「檜山節考」観劇と姨捨への旅

山梨県立文学館では戦後文壇の異端児、深沢七郎展開催中。秋の特別企画として観劇の旅を実施します。

【とき】11月6日（日）～7日（月）日帰りも可
【集合】6日12時20分 JR甲府駅改札付近
バスかタクシーで山梨文学館へ。係がご案内します。

【会場】文学館講堂（入場無料）。開演13:30
終演後、企画展展示、また隣の山梨県立美術館常設展（ミレー）も観られます（高齢者入場無料）。

【懇親会】17時より甲府駅ビル「エクラン」で開催します。会費3000円程度。日帰りの方も時間の許す限りお楽しみください。

【宿泊】東横イン甲府駅前シングル（約6000円）
お申し込みは10月10日までにお問い合わせください。
翌7日はマイクロバスで姨捨方面へ。

夕刻、甲府駅解散の予定。（バス代約4000円）

【申込】近藤宛ハガキかFAX 03-3395-0326で。

| 住所 | 氏名 |
|----------|------------------|
| 1) 11月6日 | A 甲府駅に行く B 会場に行く |
| 2) 懇親会に | A 参加する B 参加しない |
| 3) 宿泊を | A 申し込む B 日帰りする |
| 4) 姨捨の旅に | A 参加する B 参加しない |

●世話人 近藤・清野・川口・中尾・樋口・里見清子



新潮文庫『あした来る人』

杏子は大町から鹿島を目指した。克平は無事で遭難の指揮をしていたのだったが、一人で来た杏子の気持ちに痛いほどわかった。夫の心の変化をみてとった八千代は、克平と別れる決心で実家に帰ってしまう。

ヒマラヤ遠征が近づいたある日、克平は杏子とやり直す決心をし、杏子も父のような梶大助に「好きな人ができました」と告白、克平に一度会ってほしいと頼んだが、偶然、梶と八千代の立ち話を目撃したことから一切が崩壊する。

「いいんですの。会っていただかなくて」「どうして?」
「どうにお会いになっていらっしやるんですもの」
「会っている? だれだい」
「お嬢さまの御主人です」

題名の「あした来る人」とは、梶大助が過ちを犯しがちな若い世代に向けて、「やがて彼らは完全な人間となってやってくるだ

ろう」という感慨からきている。鹿島槍の遭難の指揮をとったり、規律正しい大学山岳部が出てくるあたり、おそらく加藤泰安・芳賀孝郎両氏から取材したものと思われる。大貫克平はなかなか魅力的な男性に描かれているが、実際の泰安さんを知らないもので虚と実の境は知る由もない。

またカジカの研究者という設定の陰には、俳句の歳時記を編集中だった山本健吉（文芸評論家）のサジェッションがあったことが、巻末の同氏の解説によってわかった。

作中の老実業家梶大助は、若い杏子を無償の愛で慈しみ、自分の夢を彼女に託す人物だが、その年齢は六〇歳である。あまりにも老成し過ぎていて隔世の感がある。

作家の手のうちを知ることには楽しい。読んでみて「あした来る人」は山岳小説というよりは恋愛小説である。次に「氷壁」を書くためのウォーミングアップだったという気がした。さて、次回はいよいよ……。

【編集後記】歩けなくなっても「山」は楽しい。そんな思いで本を手にかけることが多くなった。行楽の秋は読書の秋でもある。（K）